

昭和51年5月9日第三種郵便物認可（毎月1回1日発行） 昭和52年1月1日発行 通巻62号

ヒマラヤ

HIMALAYA

1977年 1月号



日本ヒマラヤ協会——HAJ

HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN



1977

今年もヒマラヤを語り、ヒマラヤを研究し、ヒマラヤを登り、そして歩きましょう。 ×××××××××××× HAJ

***** HAJ ヒマラヤ集会のご案内——どなたでも参加できます*****

【東京定例集会】—— 無料 ——

毎月第4金曜日 18時30分～20時00分
場所：トラベル日本・5F・会議室、

- 係 外池 または鈴木
- 1月28日 アフガニスタン登山隊報告会
- 2月25日 中央アジアの山と街
- 3月25日 インド・ヒマラヤ情報
- 4月22日 ガルワル・ヒマラヤ情報
- 5月27日 ラダックへの旅
- 6月休み (ヒマラヤ研究会が秋田で開かれます)
- 7月22日 カシミールの山と街
- 8月休み
- 9月30日 (23日を変更)ガルワル山麓の旅
- 10月休み (秋のヒマラヤ集会が開かれます)
- 11月25日 ネパール・トレッキング
- 12月2日 (23日を変更)アッサム・ビルマ

【北海道定例集会】—— お茶代・実費 ——

毎月第1月曜日 18時頃から、
喫茶「ねむの木」の3階特別室でおこないます。奇数月自由集会

【中部地区定例集会】—— 無料 ——

毎月第2金曜日に2月までは名古屋で、3月からは名古屋と岐阜で隔月におこないます。名古屋は名古屋駅前ホテル・ニュー・ナゴヤ747号室(エア・インディア)、岐阜は追ってお知らせします。

- 1月21日 (14日を変更)アフガニスタン登山報告
 - 2月18日 (14日を変更)中央アジアの山と街
 - 3月11日 インド・ヒマラヤ速報
 - 4月8日 ガルワル情報(岐阜)
 - 5月初旬 HAJパミール隊の合宿と合同山行の予定
 - 5月27日 ラダックの山旅
 - 6月休み (ビスタリクラブが開かれます)
 - 7月8日 カシミールの山と街(岐阜)(初旬に小登山)
 - 8月休み (8月下旬に北アルプス登山の予定)
 - 9月9日 ガルワル山麓の旅(名古屋)
 - 10月8日 ネパール・トレッキング(岐阜)
 - 11月11日 " (名古屋)
 - 12月9日 アッサム・ビルマの話(岐阜)
- 登山は前月の集会で打合せますので希望者は出席して下さい。初心者からベテランまで楽しめます。

ヒマラヤ1月号目次

＜HAJを考える その6＞

- もうひとつのHAJ 1
- カラコルムの山旅(2) 2
- ＜中央アジア紀行＞ 天山の麓へ 4
- マナスル通信(その1)～(その5) 9
- ＜H&S Plan のページ＞
- インド通信 (1)(2) 13

- ヒマラヤに関する質問と解答 14
- 第6回東日本ヒマラヤ研究会収支決算報告 14
- ＜ヒマラヤ閑話＞(10) 花の谷(3) 15
- ＜ヒマラヤ学入門 その46＞
- 外国へお金を送るには 16
- 日本からヒマラヤから 17
- 新刊・旧刊 案内 18

もうひとつのHAJ —ヒマラヤの高峰はめざさないということ—

私自身は当初は、確かにヒマラヤの未踏峰をめざすつもりだった。インドについて書かれた本も、登山隊の記録も、あるいは数多くの紀行文や人類学的な報告も、すべて雪をいただいた高峰へと集約されていくものとしてあるはずだった。

しかし、7,000mなり8,000mの山の頂に焦点をあわせて勉強していたつもりなのが、いつのまにかその視点は下へ下へとさがってきてしまった。参考になれば、ぐらゐの気持ちで読んでいたインドやネパールの人々の暮らしをえがいた本の方が、登山の記録より数倍も魅力的なものとなり、そして気がついたらもう山の方はどうでもよくなっていったのだ。

ヒマラヤの麓には、何と魅力的ですばらしい人々が住んでいることか。私はヒマラヤの麓にこだわりつづけることに決めたのだ。

そういう私の視点でHAJのことも考えていきたい。

●ヒマラヤの山々に登るといふことは、人の住んでいるところを通り抜け、ひたすら無人地帯に向かい、そこで完結するものだろう。生きとし生ける人間が住む土地を通り、さまざまなかわりを生み出すことはあっても、大多数の人達にとって、それは山に登るといふことからすると、あくまでも副次的なものでしかないようだ。だが、山に近づくまでに人の住む土地を通らなければならない以上、当然のこととして毎年ネパールやインドに出かけていく数多くの登山隊やトレッカー達は、まさしくその土地の人々とおびたじかかわりをつくりだしているはずだ。

そのことをもう少し考えに入れてもいいように思う。登山を成功に導く技術論のうえだけでシェルパやポーター達を見ていくとき、そこに“生”を持った人間への、ある種の傲慢さが生れる危険はないだろうか。もちろん、たとえば私のように山そのものよりはそこに暮す人間にひかれるといっている者にとっても同じことだが、そのことをもう少し深く考えなければならない。

おそらくこれはHAJの組織の問題というよりも、

ヒマラヤ地域にかかわろうとする個人個人に属する問題だと思う。だが、ヒマラヤを目指す人々が十分に検討を加えなければならない問題を含んでいる。

●現在のHAJの構成を見ると、ヒマラヤの山に登るのを究極の目的にする層と、トレッキングなり麓の人間の暮す土地にとどまりつづける層の2つに大雑把に分けることができると思う。すでに指摘されているが、このことが会の弱みでもあり、強みともなっている。しかし、山のみを登ってそこで完結するような山岳会のような組織は他にもたくさんある。それだからこそ、文化的側面からヒマラヤにアプローチしていく人をも含んでいるHAJは、この特色を生かしていかなければならないと思う。

ヒマラヤの山を目指す層は麓にとどまる層の上に立つものだと考えたり、あるいは、麓にとどまりつづける層もやがては高峰を目指すであろう、というような姿勢で運営されるべきでもないと思う。

確かに、高峰を目指す先鋭的な部分とそうではない部分が、ひとつの組織のなかに存在し続けていくのはむづかしい。あるいは全く別の組織へと分化していったら当然なのかもしれない。だが、それではせっかくHAJが築いてきた独自の組織形態が意味をなさないのであって、その両者がいったいどのように互いに学びあい、共存していけるか、そういう結合を生みだせる“回路”とは何かを考えなければならないのだ。それを考えることが同時に広い視野に立った「みんなのヒマラヤ」へも連なっていくはずである。

●たとえば、山に登る人々のあいだにある歴史、民俗、人類学、文献学的なアマチュアリズムの伝統をどう生かしていくか。すでにHAJに蓄積されている情報は莫大なものになっているはずだ。それを専門的知識を持っている人々とどう結びつけていくかである。麓にとどまり続ける人々の中でその専門を生かせる人達と連携してもいい

し、大学の研究者とのつながりを持つのも一つの方法である。そうすることも、HAJの可能性をより一段高いものとするに違いない。

東日本ヒマラヤ研究会のような山をめざす研究会の他に、麓にとどまりつづける人達を中心に、文化的側面よりヒマラヤ地域にスポットをあてた研究会の開催ももっと多く考えてもいいだろう。それには、当然、外部にも広く呼びかけなければならない。

それにExp研、チベット研、東部ヒマラヤ研といった専門研究会同士の横の連絡会みたいな集まりを持っていいと思う。それぞれに蓄積されつつある知識を交流させていくことも、またHAJ自体の発展にもつながるに違いない。

ヒマラヤの本を読むにしても、ヒンドゥー教や仏教、あるいはインド史の背景知識がないとよく理解できないなら、そういう背景の知識の講習会を開いてもいいだろう。ヒンディー語やネパール語、チベット語の講習会も考えてもいい。

しかし、こうして考えてみると、私を含めて、麓にこだわり続けようとする人達はずっともっとがんばらねばならないようだ。こういう文化的側面をより一層強調してゆき、ヒマラヤの高峰を目指す人達も含めた組織の中で生かしていく。こう

いう中から生れてくる力が、新しいヒマラヤ地域とのかかわり方の横糸となっていだろう。そういう、両者のぶつかり合いの中から生れてくるものが、高峰を目指す人も、麓にとどまりつづける人をも結果的に伸していくことにつながると信じたいのだ。

いささか理想論にはしりすぎたかもしれないが、民間の任意団体であるHAJは、それを試みる可能性を秘めているように思うのだ。

●会員数と事業量のバランス。あるいは運営資金の問題。それらは手元に資料もないし、詳しい事情もわからないので述べるのは別の機会にしたいと思う。それに、組織の巨大化に伴い、当然そこにはある種の“政治性”というものが出てくることだろう。ヒマラヤの土地とかかわるのにも、あるいはその“政治”からはのがれることができなくなってくるかもしれない。それは、“組織”というものにつきまとうもののだとしても、このことは頭の片すみに入れておくべきだと思う。巨大化に伴い硬直しないためにも。この問題も改めて考えたいと思う。

(東部ヒマラヤ研究会事務局 藤井 毅)
アルタイ(Altai)山脈の東にある人口約1,300万人のソビエト連邦の15の共和国のうちの一つで、

カラコルムの山旅——(2)

河西 俊郎

6月27日

インダス河沿いにトラックは登って行く。断崖をけずり取って造った道は、中国が造ったそうで、なるほど、路肩のくずれ防止法は、石を、それも、さして大きくない石をうまく積み重ねて、下部にかかる重量を分散させる工法であった。それは万里の長城の城壁を小さくしたような形であった。耐えられない暑さと下痢で疲労こんぱいしてしまい、車のゆるるままに、まるで他人の体がぐにゃぐにゃゆるるような気持で自分の足を眺めていた。

相変わらず急峻な谷間と濁ったインダスの流れ。時々そこへ流れ込んで来る支流は、まことに青色をしている。どこの水も安心して飲めないばかりか、下痢のため、水分も食物も口にしていない。気温40℃。

夕暮れ時、銃をかついだ勇猛なグループに出逢った。リーダーは背の高いみるからに人格の整った顔立ちであった。フラフラする体を起こして、トラックを降りて彼と握手をした。彼は片言の英語で“皆兄弟だ。サラバ！時間がない”というので部下を連れて夕暮れと砂じんのけむる彼方へ消えて行った。彼は独立心の高いバルチスタンであった。手入れされた銃とピストルを持って、若者と年老いた部下を連れた彼との印象的な別れであった。陽が落ちて、しばらくしてもすごいダストストームにおそわれた。ちょうど何台か前のトラックの車のシャフトが折れたとかで、部品を取りに行っている時である。この国の運転手は修理は一通り何でもできる。細い道で追い越しもできず1時間以上も待たされている間中、目も口も開けられぬ程の砂嵐であった。今日もトラックはひた走

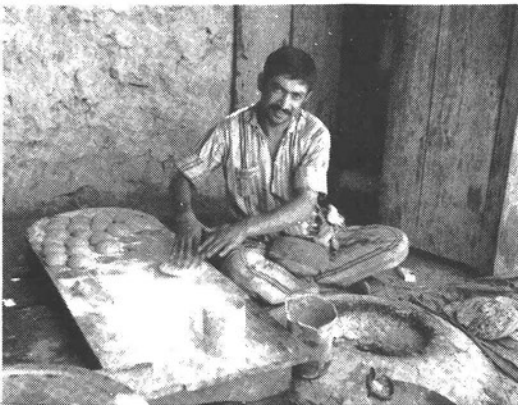
りに走って通り道のガス灯の茶店へ着いたのは10時であった。全員がトラックの上で寝る。

6月28日

トラックは砂漠の中をひたすら走って、ジャックロードに向かっている。携帯用雨傘が今では唯一の日除けであるが、また、風をさえぎるので、熱気を自分のふところへしまっておくようなものであった。

午前8時過ぎ、ひとかたまりの緑に囲まれた、ナンガバルバットのよく見える美しい小さな村ジャックロードへ着いた。ここはギルギットとスカルドの分岐点である。ここから先は道が更に細くなるのでトラックではいかれない。今日、ここで、3日間乗り続けたトラックとお別れである。運転手も助手も陽気な人であった。彼らはここから再び同じ道を、銃を片手に口笛と大声をあげて帰って行くであろう。今日の宿、ナンガバルバット・ビュー・ホテル。おとなの握りこぶし以上もある鍵のかかるドア付きの部屋。(昨日までの木賃宿にはドアは無かった)そしてハエの倉庫、いやこれでドアを締めると、ハエの缶詰の中にいるようで、顔や手、至るところにうるさくとまる。初めは追い払っていたが、疲れて眠ってしまった。

ここで初めてチャパティーを作っているところを見せてもらった。始めに炉に薪をいっぱいくべておきを作り、炉を熱くした後、まんじゅう形のチャパティーを、丸いフツンのようなものの上で平にして、そのまま炉の内側の壁にベタリとはりつける。そして数分もすると焼き上がりである。壁に当てた面はきれいなキツネ色に焦げるが、おき火の面は黒い炭のように焦げてしまう。



チャパティーを作る男。ジャックロードにて

6月30日

今日はスカルドへ着く日である。午前4時にジープは出発した。まだすっかり赤くならないアブリコットがあちこち目について、隊員は時々ジープを止めさせては、思い切り食べている。下痢の僕は“じっと我慢の子”であった。ジープはインダス河に忠実に登って行く。焼けただれたような、赤黒いテカテカ光る岩壁にはさまれて、スカルドだと言って指さす彼方は、砂山の中にわずかばかりの緑が見られる場所のようであった。

スカルドを真近に見下ろす場所へ着いたのは正午であった。雪の山から流れ出た水をうまく引いてきたこの村の水は、豊かな水量と清い水であった。すぐ近くには中国人がやっているという、マスの養殖池があった。下痢にこだわらず思い切り飲み、頭からかぶった水で瞬間的には生気が蘇ったような気がした。この村の茶屋でチャイを少し飲んで出発。ここからスカルドまでは砂漠の中を走った。運悪く前のジープが故障。待たされること30分。まるでジワジワと太陽に焼き殺されるような気がした。この砂漠にヨモギに似た、ヨモギより更に強い臭を出す植物がいっぱい生えていて、さわるとハナをつくような臭をあたり一面にまき散らした。

車の修理ができるとまた小一時間走ってスカルド飛行場の中を通り抜けた。スカルドの町の入口は清い流れがあって、さすがスカルドらしい町という印象を持ったとたん、まるで正反対にすぐ砂とほこりにまみれたバザールの中を、ジープは通り抜けていた。

今日はレスト・ハウスに泊った。この庭からの眺めは素晴らしい。まず第一に、インダス河の流れとアレキサンダー大王が築いたと、この土地の人々が自慢にしているスカルド城を一望できる。インダス河畔の夕暮れは、川面のキラキラ光るさざ波の中から空に透き通るような星を呼びよせて、それを水面にそっと乗せたような情景と信心深い人達の夕べの祈りにつつまれる。人々は一枚の布を地面にしいて、陽の沈む方へ向かって顔を地面にこすりつけるようにする。立ち上って静かに頭を垂れ、祈りの文句を唱え、そして、また地にひれ伏す。こうした繰返しを何度かするうちに、蔽かな日没を迎える。

(つづく)

まえがき

タクラマカンとは“捨てられたもの”という意味のペルシヤ語であるが、この不毛の地の西にパミール山脈があり、この北に天山山脈がある。ソ連領中央アジアの街はこの西側に広がる広大な地である。

フェルガナ盆地、カラクム砂漠、キジルクム砂漠、天山山脈に源のあるアムダリアとシルダリアの河、そして、バルシ湖、イシク・クル湖などがある。

“シルクロード”という呼名で知られているこれら中央アジアの街や人々の生活など1975年の見聞をもとにしたためてみた。

*** タシュケントを飛び立つ ***

ソ連領中央アジアの中心ともいべきタシュケントの空港を飛び立った、ソ連国内線の細長いスマートなジェット機、トウポレフ 114型はみるみる高度を上げていく。眼下には鉄筋のアパートが立ち並び、その間に、中央アジアの昔を思わせるドーム状の時代があったものなど、民族色豊かな建築物が樹林の間に見えかくれしている。それらも、あっという間に視界から消え、あとは薄茶色と灰色にモヤのかかった砂漠のような風景にかわっていく。

飛行機の中はタシュケントから地方の街へ帰っていく人たちが満員である。人形を買ってもらって、うれしそうに胸に抱いている女の子もいた。ヨーロッパ的な顔立ちの色の白い鼻の高い人が多く、“異人”さんを感じる。なかにはカザック地方からの人らしい、日本人に顔立ちのよく似た人も大きな買物かごをかかえて座っている。

ソ連の国内線は広大なソ連の庶民の足となっており、気軽に利用されているようである。国際線のようなきらびやかな感じはなく、何か日本の地方鉄道に乗っているような気がしてくる。飛行機運賃も国際線に比べて国内線は安くなっている。

そのせいかどうか、どの飛行機もほぼ満員で、空港には切符を手に入れるために何日も待っている人がいるようであった。スチュワーデスの配

てくれた、砂糖のよくきいたうすい色のオレンジ・ジュースを飲み、さきほどと変りばえのしない外の風景に退屈し、うつらうつらしていると、やがてエンジンの音が高くなり、機は旋廻しはじめた。

見えた、天山の一角が太陽に映えている山々。「あれぞまさしく天山だ」心の中で叫ぶ。“テンション”という発音は中央アジアの山々にひかかれている者の耳には何と快よく響くのであろうか。その天山の麓に、今まさに、やってきたのだ。軽い興奮に心がふるえる。

やがてアルマ・アタの空港に着いた。南の方には遠くに天山の支脈がはしっていて、西の方は開けた平原になっているところにアルマ・アタの飛行場があった。機を降り立った私を包むように、乾燥した快よい天山の風が吹き抜けて行った。1975年8月18日のことである。

** 中央アジアの都市、アルマ・アタ **

カザック・ソビエト共和国はボルガ川の上流、アルタイ(Altai)山脈の東にある人口約1,300万人のソビエト連邦の15の共和国のうちの一つで、カザフスタンとも呼ばれている。北西はシベリアの大平原に続き、東南には天山山脈がそびえている。標高750mのこの中央アジアの街は冬はマイナス40度にも下り、夏は東京の夏のように暑いという大陸の気候である。

カザフスタンの面積は全ソ連の8分の1をしめる広さであり、ロシア共和国に次いで2番目に大きい。面積は270万平方km、日本の約10倍である。このカザフスタンの主都が人口約80万人のアルマ・アタである。ソ連邦の中では新しくできた都市の一つでもある。

1854年頃はカザックは小さいいくつかの開拓地の集まりであったが、その後、ザイリスコヤ国(Zailiiskoya)の要塞都市となり、やがてロシアの一部になった。1917年の10月革命のおこるまでの約半世紀の間はアルマ・アタの街はベルニイ(Verny)という名で呼ばれていた。ベルニイの人々は日干レンガの家に住み、水道もなく、舗装された道もない生活であった。1915年のベル



ニイ町議会の議事録によると「道路の照明を設備する必要はない。その理由は夕方には街人たちは家に引きこもってしまい、外を歩かないからである」などと記録されているようだ。いかに淋しく、暗い街であったかが伺われる。

*** 革命ののろしをあげたベルニイ ***

19世紀の終りごろにロシア社会民主同盟の活動者は帝制ロシアによって追放され、ベルニイへやってきていた。

赤軍の司令官であったフルンゼ (M.V. Frunze) はこのベルニイで教育を受け、彼の革命運動をおこした。そして、最初のカザックの地理、民俗、歴史の学者でもあった。コーカン・パリカノフ (Chokan Valikhanov) (1835 ~ 1865) もこの街で数年間働いた。いまでもアルマ・アタ市内のレーニン宮殿の北東、カルヌナ通りに彼の銅像がある。1905年社会民主同盟の人たちはここで活動をはじめ、政治的な動きをするようになった。1918年3月2日の夜、ボルシェビクをリーダーとして、革命軍人、労働者、貧しい農民などがベルニイで帝政ロシアの圧政に対して立ち上った。この年の3月、モスクワが首都となった。

*** 古い時代のアルマ・アタ ***

19世紀の終り頃にソ連の考古学者がザイリスキイ・アラ・タウ (Zailiisky Ala Tau) 山麓の丘を発掘し、古いアルマトウ (Almatu) (リンゴの意) 開拓地の遺跡を発見した。このアルマトウはシルクロードのキャラバンの行きかうルートにあったもので、かつてマルコ・ポーロや中国の高僧もここに泊ったと記録されている。

カザフ人はトルコ系のチュルク族の人種で、ひきしまった身体と日本人に似たモンゴル系の顔立ちをしている。昔は彼らは遊牧民であり、紀元前1世紀のころから烏孫国という名で栄えていた。漢武帝がこの烏孫国と友好を結び、この力を利用して北方にいた匈奴をやっつけようと考え、漢の都の王の娘をここに嫁がせたという話が中国の古書に出ている。その勢力は現在の中国の新疆省あたりまでおよんだと言われている。6世紀頃にはチュルク族の一派であった突厥がこの地を支配したことが独自の文字で記録した碑文などからわかっている。この当時の遺物の一部は今でもアルマ・アタの博物館にある。この時代から何度もアルマトウは侵入者によって破壊された。ベルニイはこのアルマトウの遺跡の近くにあったのである。

インツーリストのガイドは「近代化する以前のアルマ・アタの人は一夫多妻だったんです。50人もの妻をもった人もいましたね。そういう人は普通が一番若い人と住んでいたんです。もっとも、多くの妻をもらうにはお金持でないとできなかったのですがね。結納金にあたる“カーフ”を1人1人に贈らなければならなかったから。もちろん現在は法律で禁止されています」と話していた。

ロシア小史

ソ連領中央アジアの姿を理解するには、ロシアの歴史を少し知っておくことが望ましい。以下はほんの概略のロシア小史である。

モスクワの西にキエフというドニエプル川の中流に花と緑の美しい都市がある。このキエフという名前は古代ロシアの国の名であった。今から1,000年ほど前のことである。このキエフ公国は13世紀にアジアからきたモンゴル軍に滅ぼされてしまい、その支配下に長い間泣かされたのであった。しかし、東の方、現在のモスクワ地方ではアジア系支配民族、タタール族の支配もそれほど強くなかったので少しづつ勢力をばん回し、やがて1380年にドン河の川岸でモンゴル軍を撃破した。

そして、イワン雷帝として有名なイワン王がこの地をおさめることになった。イワン雷帝(4世)の没後はロマノフ王家の時代となる。この頃のロシアは大地主と農奴の時代であり、自由を失なった農奴がいたるところで悲しい目にあった。これらのことを歌った民話や民謡は今でも語りつがれ歌いつがれている。1667年の春、ステンカ・ラージンにひきいられた農民は反乱をおこしたが、成功はせず、ステンカ・ラージンは「赤の広場」で処刑された。「ステンカ・ラージンの歌」がその悲しくも勇ましい話を伝えている。

17、18世紀はピョートル大帝、エカチェリーナ女帝と続き、ヨーロッパへ進出したりして栄えた時代であった。この頃の首都はペテルブルグ(現レーニンград)であった。19世紀には若いアレクサンドル一世が即位したが、このころヨーロッパではフランスのナポレオン一世が勢力を拡大しようとしていた。そして1812年についてロシアとフランスの「祖国戦争」が始まった。この戦をテーマにしたのがトルストイの「戦争と平和」である。1860年代に入ると農奴開放がおこなわれ資本主

義が発達した。しかし、その結果、貧富の差が大きくなり不満をもった人々から社会運動がおこってきた。1904年に日露戦争がおこったりして民衆の不安はますます増大した。この時代を背景にしたロジオン・ロマーヌイチ・ラスコーリニコフ青年を主人公とした小説がドストエフスキーの「罪と罰」である。

1898年には「ロシア社会民主労働党」(ソ連共産党の前身)ができた。1905年1月9日に10数万人の労働者が首都に押しかけたが官憲によって1,000人以上が撃ち殺された。この「血の日曜日」がきっかけで「第1次ロシア革命」がおこった。このリーダーの一人がレーニンで、彼のひきいる多数派を意味するボリシェヴィキ党は労働者、兵士などを結集し「ソビエト」(会議の意)をつくり、大活動をした。この大運動のため、ついに300年続いたロマノフ王朝はたおれた。これが「2月革命」といわれている。そして、旧暦10月25日(新暦11月7日)冬の宮殿をレーニンの軍がとり囲み、いまでもレーニンградに残っている「オーロラ号」の巡洋艦もその手中におさめて一気に臨時政府を打倒した。これが「10月革命」である。ジョン・リードの「世界をゆるがせた10日間」(岩波文庫)がこの大革命をよく書いている。

レーニンは1924年に没したが、1930年代後半からスターリンによる自分の意にそわない人を処刑したり投獄したりという「粛清」がはじまり、ソ連全土は不安とおそれにおののいた。

ちょうどその頃、1939年にはヒトラーのナチス・ドイツがロシアへ侵略をし「大祖国戦争」が始まった。しかし、ソ連の人たちはよくこれと戦い、1945年5月2日についにベルリンを占領した。1956年からはスターリンの個人崇拜の批判がおこなわれ平和がよみがえった。工業国としてますます発展してきている。そして、1957年の人工衛星スプートニク号の打上げにはじまり、1966年の月ロケット軟着陸成功と発展している。

アルマ・アタの誕生

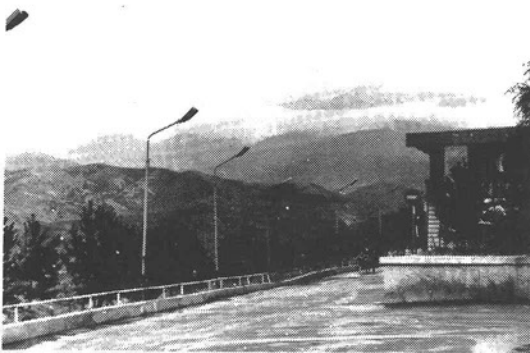
1921年2月5日、労働者の意志で、軍事革命委員会を結成し、「帝国ロシアの中心であったこの町は今日から革命の中心となる。そしてロシアに“忠節な”という意味のペルニィの名前をカザフ語で「りんごの父」という意味の“アルマ・ア

タ”と呼ぶことにする」と宣言した。

実際アルマ・アタの街には公園にも、歩道の並木にも民家にもリンゴがなっている。アポート種のリンゴで大木になる。この木陰もまたアルマ・アタでなくてはならないものの一つである。そして1929年アルマ・アタはカザックの主都となった。この年はトルクシブ鉄道と呼ばれたトルキスタンとシベリアを結ぶ鉄道がノボシビルスクからアルマ・アタの工業・社会・文化に大きく働きかけることとなったのである。1930年代には食料工場など多くの工場や企業が近代化され、1940年には一大工業地帯となった。

第1次大戦(1914～1918)中はアルマ・アタは前戦から離れていたのが兵器庫としての役目をはたした。そして、病院、研究所、映画製作所、劇場などがここへ移ってきた。ナチの侵略に対して、“パンフィロベット”(パンフィロフ元帥によってアルマ・アタに創立された幼年兵団)という合言葉で故国の防衛にあたった。中でも第28パンフィロフ義勇軍はモスクワへ進撃してくるヒットラーのタンクを勇敢に阻止した。現在もこれを記念してアルマ・アタ市内にパンフィロフ通りという通りとパンフィロフ公園があり、公園には記念塔が立っていていつも市民によって花がそなえられ、絶えることのない聖火がともされている。そして、小学生の男女2～3人が銃をもってこの記念塔を守っている。勇ましい戦士のレリーフは戦争の悲惨さと雄雄しさを語っているようであった。

山の麓から道ははじまり、谷の低い方へむかって作られていて道の両側には巾1m深さ1m位の



アルマ・アタ郊外の丘より天山の一角を見る

大きい溝が作られている。この溝は“アリクス”と呼ばれ天山の水が勢よく流れていて、涼しい空気を人々に運び、水分を並木にあたえている。

*** 今日のアлма・アタ ***

アルマ・アタにはモスクワから約5時間半、3,320 kmほどあり、ノボシビルスク、タシュケント(800km)、ドシャンベ(1,400km)などと航空路が通じている。飛行機がアルマ・アタに近づくと緑のオアシスのように畑と市街が見え、そのうしろに雪をかむり氷河をしたがえた天山山脈が見える。

今日のアлма・アタはソ連の中でも有数の工業地帯となっており、工作機械、トラクターや自動車の部品、農業機械、発電用機器などを作っている。そして、これらは世界30カ国へ輸出されている。カザフスタンはカン入りの果物やジュース、コニャック、シャンペン、織物、毛皮、金、民芸品、石灰と金属の産地である。

カザックの偉大な詩人であり思想家であったアバイ(Abai)(1845～1904)はカザックの人たちを素朴で、勇気のある得がたい人種であると評している。アルマ・アタには彼の名のついたアバイ大通りやアバイ教育大学があり、市内のレーニン宮殿の前には彼の銅像がある。

アルマ・アタには17の高等教育機関、14の専門学校、約150の一般学校がある。S.Mキロフの名前をつけたカザック大学では10,000人の学生が高分子科学、冶金学、地質学、建設学、自動制御などを学んでいる。アルマ・アタの人口の4分の1はこれらのいずれかの学校で勉強しているほどである。また、カザック科学アカデミーは約30の研究所をもっている。

アルマ・アタは印刷と文学と芸術の出版の中心でもある。20種以上の新聞や雑誌が3つの言葉で出版され、ラジオは4つの言葉で放送されている。地震が多いので高い建物は少ない。1910年の大地震のあとで街は整備され、碁盤の目のように道ができています。7つの演劇場があり、交響楽団、映画製作所、ウクライナの詩人で画家のタラス・シェブチェンコ(Taras Shevchenko)の作った芸術博物館などもある。また、100の映画館、350の図書館がある。図書館には2,300万冊の本があるという。プーシキン革命図書館はカザフスタン

で最大の図書館であり、18世紀のヨーロッパの出版物、東洋の資料などで有名である。

現在は中央博物館になっている大きい建物はかつて19世紀のロシア正教会寺院であったもので、世界でも最も高い木造建築の一つであるといわれている。

アルマ・アタ・スポーツ宮殿は、大きい噴水をもつ池がある、すばらしい広場に建てられている。3,000 座席をもつホールのあるレーニン宮殿もすばらしい。ロシア・カザック演劇場(2,000 席)もある。立派な円形競技場、結婚式場もある。アビ大通りとサイフリン大通り(Seifulin)が大きく、長さ12kmある。リンゴの木々の間をむこうに天山の一角を見ながら歩いていくのはアルマ・アタならではの楽しみである。

*** メデオのスキー場 ***

マーロエ・アルマ・アタ溪谷に行く途中には数々の世界記録を生んだ高山アイススケート場、メデオ(Medeo)がある。立派なリンクとそれを囲む観覧席がある。ここにはホテルや映画館もあり、市民のいこいの場所でもある。

メデオからさらに登って行くと、アルマ・アタの街を山崩れと雪崩から守っている180mの高さのダムがあり、さらに300mほど登るとチンビュラック高原(Chimbulak)に着く。そこにはゴレルニック・スキー場(Gorelnik)がある。ここには2つほどツアーリスト・キャンプ場があってヒュッテも建てられている。

もう一つの市民のいこいの場はコクテュベの丘(Koktyube)である。“コクテュベ”とは“緑の丘”という意味である。アルマ・アタ市の東南にあるレーニン宮殿のそばからケーブルカーで登って行く。標高は約2,000mあり、ここからアルマ・アタ全市が望まれる。ただし、何故か西の方は撮影禁止になっている。アルマ・アタは年間300日は晴れているといわれるので、たいがい良い展望が得られるのだが、私が行ったのは8月下旬であったがそのときは相憎のガスで天山の方はよく見えなかった。しかし、ゆるい丘になったところに沢山ある果樹園、ポプラやエルムの林と並木通り、そしてイリ川(Ili)が蛇行して流れているのが見える。

丘の中央にはレストランがあってピロシチやア

イスクリームを売っている。こんな天気なのに結構、人がきていて、アイスクリームはあっという間に売り切れてしまった。ソ連の人はアイスクリームが大変好きなようで、モスクワやレニングラードなどでもアイスクリームをなめなめ歩いている大人や子供が多い。空気が乾燥していて喉が乾きやすいせいかも知れない。たいていは“はかり”で目方をはかって売っている。

展望もよくないし、寒いのでおりにことにした。ガイドが見当らないのでケーブルの乗場で待っていた。若いカップルが肩を寄せあって反対側のさくにもたれてアルマ・アタの街を見下ろしていた。

ガイドは30分もたってやってきた。私をさがしていたそうである。

「西の方の写真をとらなかったでしょうね」と何度も念を押していた。軍事工場でもあるのだろうか……。ソ連では外国人旅行者の行動範囲は限定されていて、例えばこのコクテュベの丘にテントをはってどんどん奥の方へ登って行ったりするには、モスクワのインツーリストの本社へ電報で問合せ許可を得なければいけないんだといっていた。多分その許可はもらえないのだろうが…。

(つづく)

参加者募集中 HAJ 遠征計画

- 1) パミール遠征隊 1977年7月～8月
すでに準備はすすめておりますが、1月中旬より本格的トレーニングに入ります。1月末日をすぎますと手続上参加できなくなりますので、希望の方は大至急ご連絡下さい。
- 2) パキスタン登山隊(ブレ・カンチ計画)1978年
カラコルムのユクシン・ガルダン・サール、パツラⅡ、ラカポシのいずれかに登山隊を出す計画をすすめています。
- 3) サセル・カンリ隊(1979年)も計画中です。

マナスル通信…………… 清水 澄

清水澄さん(長野県諏訪郡原村)はイラン・日本合同隊補強隊員として参加され、マナスル(8,156m)で活躍中。以下は現地便りの一部である。なお、同隊は10月22日、影山隊員他2名が登頂。

(その1) 8月22日 ブリガンダキのキャラバン途中、アルガート・バザールより1日上流の村で

あわただしい出発にもかかわらず種々、御配慮をいただき、感謝致します。御挨拶もろくにできず出発したことをお許し下さい。

羽田の出発便のおくれも、バンコックでの乗継ぎがうまく行き、一日でなつかしいカトマンズに到着しました。旧友と親交をあたためるヒマもなく手続を終え、19日にはトリスリ・バザールからキャラバンの第一歩を踏み出しました。

なれているネパールとはいえ、今の時期は雨期で湿度も多く、1時間も歩くと体中乾いた所がなくなってしまうありさまです。トレッキングの外国人も殆ど通らず(主街道でない)来る日も来る日も山また山、谷また谷の水田地帯をブツとばして本隊を追いました。ネパールの道は“ハダシ族”に好都合で、渡河や畦道で靴を脱がせられる場面も数ありました。稲は植えたてから穂ばらみ期までいろいろあり、なかにはアンモニアなど散布している光景もみました。水田は草だらけで特にオモダカ、カヤツリが水面も見えないほどできています。一応除草もしていますが、何せ、出鱈目のうねなしですので、丁寧にはできません。

オカボは収穫期、刈ったものを小束にまとめてすぐ脱穀、石に3~4回打ちつけるだけで簡単に脱粒してしまいます。モミだけ家に運んで乾燥します。もちろんワラは家畜のエサになります。

どこの家でも水牛を2~3頭、牛も2~3頭飼っており、放牧は子供の役目です。

キャラバン3日目の8月21日で本隊をキャッチしました。それまでネパール食だけでやりましたがやはりどうにもノドを通すに抵抗があり、本音は茶とミルクで命をつないだようなものです。本隊はラーメン一つ残してくれておらず、きびしい道中でした。暑いので飲んでではならないといわれる生水も遠慮なくやりましたが、一応下痢もしていません。相棒の風間君は湧水以外飲ませないようにしましたが、キット私の数倍もつらかったことでしょう。

日本側メンバーは一応顔だけは知っていたのですが、イラン人は未だ名前さえおぼえられずダメ

です。なかなか、なごやかにやっていますが、実質面の仕事は日本側で処理せねばならず、大変なものです。

イラン側には英語のできないメンバーも半数ほどおり、ことは面倒ですが、私は隊のことについても何もわからず口出しをしないので、楽な面もあります。

ここで我が隊の規模などお知らせしましょう。(現キャラバン時点で)

日本人9人、イラン人8人、ドイツ人1人(イラン側客員隊員、70才のカメラマン)、シェルパ39人、ポーター530人、1日にかかるポーター代10,000ルピー(日本円で約240,000円)。

本当のところどうなってキャラバンが動いているのか判りません。シェルパとポーター頭にまかせてあるのです。シェルパも大人数なのでかえって統制がとれるのかもしれませんが。

まあ言ってみれば大名旅行ですが、それだけにそれぞれの個性も埋没して、生き甲斐のあると言う訳にはいきません。好ききらいを言うてはいけません、こんな大きな遠征隊に参加していると小さな遠征の良さも一面では強く感じます。

本隊食料は一応日本人、イラン人とも食べられるメニューですが、ゼイタクなものです。

一例(と言っても私には2度目の夕食ですが)玉子スープ、ネパール産きうり(とても大きい)もみ、かつおフレック、スパゲッティミートソース、デザートにみかん缶、ティーorコーヒー。

今日、(8月22日)からいよいよブリ、ガンダキ沿いに朔行して行きます。現在、ここの標高は600m程度。夜はハダカでないといわれません。あとベースキャンプまで10日程の見込みです。有名なブリ・ガンダキの難路は如何ばかりかと期待して、毎日降られたり、照られたりして忙しく進んで行きます。

最後に私の体調ですが(特に私は暑さに弱いので)、少しバテ気味。ピンチヒッターのため、精神的な準備がないせいだと思います。食欲があまりなく、無理しても口から出そうになり、水もの

ばかりとっています。それも甘いダメです。まあ、だんだんよくなると思います。

==== (その2) 9月7日 サマ村に近いマナスルベース・キャンプにて =====

いやになるほど長いキャラバンの末、18日目によくこのベース・キャンプ(BC)につきました。何からご報告申し上げてよいのやら、ただただ地の果にきたような感慨のみです。

ここ、BCは高度3,850m、サマ村から1時間半、岳樺とネズのまばらな林にかこまれた古い河原で20年前、マナスルの初登頂を果たしたJAC隊の根拠地でもありました。マナスルはここからピラミッドのように高々とそびえ、さすが8,000m峰の貫録充分です。マナスル氷河はいわゆる一般の氷河のような氷河流が長々と岩石を運び出すタイプではなく、アイス・フォール(氷瀑)の氷が一気に氷河湖にたたき落ちて終わってしまいます。そのため美しいエンド・モレインやサイド・モレインの丘もなければ平和な草原のアブレーション・ヴァレイもありません。そのため山の高さ以外は失って魅力がありません。昨年のガルワールヒマラヤのような、あの何とも言えない人間を魅了してやまない憧憬の地とはおよそ似ても似つかないものです。

例えば、花についてもその品種の豊富さはとてもガルワールにおよびませんし、山々の眺望にしても、この谷間では名のある山をあげることはできません。何よりもあの氷河の草地にねころんで空を流れる雲に思いをはせながら昼寝をむさぼる優雅さに欠けています。

そして、ここではこんな山の中まで来ても人臭いヒマラヤ人の生活に無関係ではられません。BCはいうにおよばずキャンプ1(C1)まで行ってもチベット人からの盗難に注意しなくてはならないそうです。

ちょっとグチっぽくなってしまいました。私の過去の経験から、すこしぜいたくになっているのかもしれない。では少しキャラパン中やこの付近のこの状況について記すことにします。

ブリガンタキを行く

8月24日のキャラバンの頃より水田は姿を消しました。代りにモロコシ畑となり、また生育の早いオカボの後作としてヒエが植えられていました。

2,000m近辺では湿潤地帯ですので種々の作物

や野生のものがあります。例えば野生のサトイモ、レンコン、オクラ、大麻、ミョウガなど実によいものがありました。ミョウガの芽は真赤に近く、また、その花はほとんど散っていましたが白く可憐なものでした。

ブリガンダキの険路も往時よりも改良されたのか、JAC隊の映画でみたような厳しさはなく、普通のヒマラヤ道でした。といっても決してやさしい道ではありません。一歩あやまれば命はいうにおよばずその遺体さえも捨てることはできません。実は私たちのキャラパンにも1人の犠牲者が出ました。少し危い橋だったので、ポーターの1人がそこから激流にのまれ、ついに遺体も上りませんでした。小生はこの処理に過去の経験を買われて当り、リエゾンオフィサーと共に一兩日を奔走しました。

このキャラパンルートのジャガットという村を接点として、以奥はラマ文化圏となります。とはいえ、住民は変わらずタマンまたはグルン族です。私たちにとってはヒンズー文化圏よりも何か親しめる気がするの、大局的に見るならば、ラマも仏教の一派だからでしょうか。

ブリガンダキ最大のシアール・コーラを分けて有名なニャック(Ngyak)村に到りますと様相は一変し、非常に不潔な村となります。言わば“タレ流し”の村で、集落の中はとても立止ることができません。私達は如何に“クソ”を踏んづけないかに神経の大半をさく始末でした。特に、雨期のせいか……とに角、ご想像いただく他にありません。こんな汚ないものを見るためのヒマラヤではなかったと、つくづく後悔した次第です。そして、この知見は過去数回のヒマラヤですべて解ったつもりでいた私のヒマラヤ住民に対する知識を新たにするものでした。

ナムルーと言う村以奥は完全なチベット村で、行き合う村人のチーズ臭さに、私の憧れの臭いもこんなものだったのかと感じ、多少日本の着物にも似た彼らの着衣に共通性を見出したりしました。しかし、とに角チベット人のボロと人なつこい笑顔とその奥にかくされたズルさをいやと言うほどに味わう毎日でした。

さて、以後の登山の進展についてですが、言うまでもなく私はピンチヒッターですので思うように動けない点もありますが、しかし、この経験こそ私の目ざす理想の遠征への道程を、より明確にするものとして位置づけられるでしょう。私自身

は魅力ある8,000 mの頂上はあきらめました。しかし、私は私の手で必ずや登頂者を最終キャンプから送り出してやりたい——これだけを願っています。

（その3） 10月1日 第2キャンプ5,800mにて

早いものでもう10月、日本も大分秋色が深まり、とり入れに忙しくなっていることと思います。当地でもベースキャンプの木々が色づき、雪線に近いところの草は枯れてきました。ベースキャンプを作ってもうすぐ1カ月になろうとしています。登山の進展は丁度、中盤線というところです。とに角大きな隊であり、しかも、素人に近いイラン人と合同ですから止むを得ません。今までじっと見っていますが、彼らは未だヒマラヤ遠征をするほどになっていないようです。それだけに日本側も国際親善という大前提に立って、気長に、そして親切に教えながら頂上に立たねばなりません。ともすると若い人は腹の立つこともあるようです。

今、隊は最も危険な氷塊の折重なる地帯を工作して、第3キャンプ予定地に達したところです。ここはマナスルを初登頂した日本隊が今から20年前に通ったところですが、その頃とは大分状況が変わったのか、韓国隊がナダレで15人もの人命を失っています。第3キャンプを過ぎると第4、第5と雪と氷の壁となり、これまたナダレの危険地帯です。

秋のマナスルは春とはすっかり相違して、結構、危険です。しかし我が隊は物量は豊富ですので、じっくり腰を落ちつけて必ず登頂すべく、ジリッ、ジリッとせまっています。

第2キャンプは高度5,800 m、有名なナイケ・コルから更に登ったところにあります。雪と氷以外は何もない世界です。ここで、すでに空気は地上の半分以下、ちょっと体を動かすだけで息がはずみます。朝夕は雲がはれて北にチベットの山並が望めます。あの赤茶けた高原は如何ばかりかと、ヒマラヤへくる度に憧憬の念を禁じ得ません。手のとどくような近くにそこへ通じるギャラという峠道の広々とした谷が開けて、帰りには行ってみたい誘惑にかられますが、峠には中共の兵営があるとかでとても無理な話です。

キャラバン中で泣かされたブリ・ガンダキの深

い溪谷をへだててスリング・ヒマールやガネッシュ・ヒマールの山並がせまりますが、これらの山々はネパール政府が何故か登山を許していません。そして眼下には、来し方、マナスル氷河のクレバスや氷塔が乱雑に並んでいます。

小生はこの大きな隊の物質の運搬を司るため前線には出ていません。これだけの隊になりますと、荷上げの運行管理が死線を制することになりますので、過去何回かの経験が非常に役立っています。どの程度の物量が動いているのか参考までに記しますと、

BCまで	15 トン	C3	1 トン
C1 "	5 "	C4	500 キロ
C2 "	3.5 "	C5まで	150 "

となり、これで順調に行くと8人程度頂上に立てることになる訳です。

本来、マナスル程度の高さ(8,156 m)の山ですと酸素もそんなには使わないのですが、今回は大事をとって70本も持ってきており、7,000 m以上の睡眠と隊員の行動中使うことになっています。寝ているとき酸素を吸うのは大変有効なことが判っています。

本格的に頂上にせまるのはもう半月ぐらい後のことでしょうか。小生は任務上、第1次登頂隊員を安全に成功させなければなりませんので、うまく行かないと登頂の機会はありません。と言う訳でかえって気が楽(などと言うとオコラれますが)です。

隊員の紹介を致しましょう。まずイラン側から。

1. ハクビッツ 退役の陸軍准将 54才
きれいな好きでチョッピリチャっかり屋
2. メヒディザデ 印刷技師 40才
隊一番の紳士、自ら登れないが隊の中心
3. ラブーキ 文房具店主 30才
テヘランのパザールに店がある金持
4. ベヒザデ 陸軍中尉 31才
登山家ではないが、レインジャーで言語は隊

一番。

5. ママブール 鉱山会社事務員 54才
資産家の坊ちゃん。ダマバンドに50回も登った。
6. ベヒザデ 農林技官 29才
山羊の解体などお手のもの。最も性格が良い。
7. ヘンディ 陸軍軍曹 32才
馬力あるが技術なし。
8. ダットファルマ 製糖会社員 32才
あわて者、判っていないのにいつもイエス、イエス。
9. ゴルテル ドイツ人 70才
映画をとるために呼ばれた。この年でC2まで登る。

日本隊員

1. 田村 宣紀 36才 電々公社 長野市
登攀隊長
センキで通る。マネージメントよし。
2. 木村 博 35才 電気会社 名古屋市
マネージャー
風邪をひいて前線に未だ出れずテントでエロ

(その4) 10月16日 ベース・キャンプにて

マナスの“ツメ”は意外とやさしく、すんなりと登頂にいたりました。10月12日、日本、イラン、ネパール各1名からなる登頂隊は午前8時30分第5キャンプを出発し、8時間登り、午後3時40分、8,156mの頂上に達しました。

秋のマナスは休みなく吹く偏西風にあおられ、登頂者の影山淳、アサディ中尉の2隊員は軽い凍傷にやられました。また、高処の酸素不足が招く視力減退から雪盲にやられました。パサン・シェルパは何とかよかったです。

翌日、総隊長ハクビック准将は登行の打切りを宣

(その5) 10月21日 帰途のキャラバン 初日、サマ村の近くで

はるかなるネパールのブリ・ガンダキの奥で「ヒマラヤ」を拝受。ありがとうございます。

ベース・キャンプからラルキャ・ラへ行ってきましたが、ヒムルン・ヒマールやチェオ、カングルなど眼前に広がっていました。

お手紙下さった皆様、ありがとうございます。いちいち、お返事しなければなりません、「ヒマラヤ」誌上を借りて厚くお礼申し上げます。

— 本を読む。

3. 島田 良 39才 山の道具屋 諏訪市
顔が少しむくんだがそれでもC2で未だに酒をのむ。すぐ40才になる。
4. 曾我 謹昭 35才 山の道具屋 名古屋市
英語を話す時、アンドが得意。カメラをこわしてゴミ箱に捨てた。
5. 風間 毅 28才 電気会社 長野市
登る度に頭痛で頭をかかえる。8ミリを担当。
6. 影山 淳 28才 電気会社 名古屋市
実家は静岡のお茶屋。食糧係でいつもシェルパをどなりちらす。
7. 清水 公男 医者 松本市
ノンビリした医者。遠征中一度隊員の血圧をみただけ。
8. 当然紹介すべき男なれど筆者故、省略。
9. 飯島 正直 新聞記者
数々記事を送っている。

マイナス10度以下のテントで氷河崩の音をききながら。

言しました。(中略)

マナス山麓は登山に疲れた私達をすばらしい紅葉で迎えてくれました。ヒマラヤにもこんなにすばらしい秋色があるのか……。赤と黄と茶のとり合せて雪の白、岩の黒、空の抜けるような蒼、この世のものとは思えぬ美しさです。

予期せぬカムパ族の再反乱があり、マナスの北側にまわってマルジャンディの谷に行くことはダメになりました。せめて、ラルキャ・パンジャンの峠までと思い、往復、4日もかかるのですが、行ってみることにしました。

ニカンチ委員会の動き ————— 1977 ————

第3回委員会からはテーマをもった研究会を開いている。第3回は「高処順化の諸問題」。

1月中旬 「トランス・ポートをめぐる」

2月中旬 「カラコルム登山のタクティクス」など研究をすすめています。このあとは「組織運営をめぐる諸問題」を予定している。研究成果は、「Expedition II」として発行される計画。

インド通信(1)

1976年10月4日、ニューデリー
 東部ヒマラヤ担当 藤井 毅

《ニューデリー近況》

インドは確かに変わりつつある。3年前にニューデリー空港におりたったときは、赤茶けた土地と地平線が見えたのに、今ではそれらはビル建築の工事現場にとって変わっている。

ニューデリーのような大都会に限れば、それは東京の、ある延長線上に存在するといつてよいであろう。お金さえ出せば手に入らないものはないし、ついこの間、東京で聞いた音楽と同じ流行の最先端の音楽が店先から聞こえてくる。都市に住む中産階級の人たちは、やはり東京と同じような生活を送っている。

インディラ・ガンジーの非常事態宣言後の一連の政策はおどろくほどインドのすみずみまでにおよんでいる。

オールド・デリー、ニューデリーで私の見た範囲に限れば、まず第一に、すべての店の品物に値札をつけることがおこなわれている。どんな商店のどんな商品でも例外はない。オールド・デリーのあの小さい店でも、あのごみごみした商店街でもそうである。値札がないのは小さな露店だけである。しかし、その露店もニューデリーからは、ほぼ姿を消しつつある。あるのはアイスクリーム屋、水売り、新聞屋ぐらいのものである。

そして、すでにインド式に買物のとき、“ふっかけられる”ことはなくなりつつある。観光客相手の店でも正札つきで売られている。この点、確かにインドの都市部は外国人にとって旅行し易くなっている。

3年前には、沢山いた靴みがき屋も90%くらいなくなっている。タクシーもほとんど新しいメーターになっている。そして、都市部の物価は何でも上っている。

どこへ行っても見られるもの、それはインディラ・ガンジーの顔を刷り込んだポスターだ。ほとんどすべてのものが何らかの形で政府の統制下におかれていると考えてよいであろう。横丁のバザールといえども例外ではない。オールド・デリー

のあの雑踏が私にとってただ一つの憩えるところだったが、そのオールド・デリーさえ、常に町の一角には100人近い警察官が待機している。

インド通信(2)

1976年10月5日 ニューデリー
 《ナガランド情報》

ニューデリーにあるナガランド・ハウスの責任者(Chief Liaison Officer)のK氏に会うことができた。面会の約束は簡単にとれ、直接、オフィスに向いて40分ほど話した。K氏はモンゴロイド系の顔立ちで、日本人そっくりである。ただ、目つきは非常にすどい。

ナガランド・ハウスはJanpath通りと交差するAuranzeb Road 29にある。近くにはMeghalayaやPunjabといった各州の出先機関が点在している。

衆知のとおり、ナガランドは独立運動を展開してインド中央とのあいだに武力衝突さえおこしたが、そのことに関して、K氏の口からいくつか興味ある話が聞けた。

その話を伝える前に、まず彼のおかれている立場を説明しなければならない。彼は肩書きの通りナガ州政府とインド中央政府の連絡を担当している。コヒマ(Kohima)とデリーとの間を行ったりきたりして、連絡を密にしている。

彼のスタッフはすべてインド人であるが、彼と私の話はインド人のスタッフをさけておこなわれた。彼は、はっきりと「インド人スタッフに聞かれるとまずい。彼らは中央政府とつながっている」といった。

つい先ごろ、日本の新聞でもナガ州政府とインド中央政府とのあいだに和解が成立したことが報じられたが、彼はそのことには触れず、「すべてがアンダーグラウンド(地下組織)にある」といった。彼が、ナガ族の中にあるさまざまな、和解派、穏健派、中国派などのセクトのどの部分に属しているかは知らないが、「中国にもナガ族が越境して軍事訓練を受けていた」という。

もちろん、私が出向いた目的はナガランド入域についての助力を求めてであったが、それについて

て「ナガランドはRestricted Areaで、ここへの入城許可を出せるのは、インド中央政府の内務省のDupty Secretaryである。だから、まず、そこと交渉しなければならないと思う。しかし、私と会ったことや、私の名前を出さない方が、あなたが許可をとるにあたっては得策だと思ふ。ナガランドには外国人旅行者用の施設がないが、私の兄が州政府の役人などの彼の家へ泊ったらいだろう」といった。

また、「ナガランドとインドとの政治的な関係がいまの状態になるのには、第2次大戦中のインパール作戦をはじめとする一連の英・印・日の軍事行動が大きく関連している」という。私はその事実をまだ知らないが、この言葉は重要なヒントになり得る。コヒマ周辺には日本軍の残したものが、それこそゴロゴロしているという。

彼は、ナガランドとインド中央との関係に関して「Peace in Nagaland」という最近出版された本を推薦してくれたが、それを読めばあるいは彼のおかれている立場なども分ると思う。

K氏は10月末頃にデリーを出てナガへ向かうが、その前に内務省との交渉をし、その結果の報告もかねて、彼のところでナガ式の食事をごちそうになることになった。また、そのときは興味ある話が聞けるかも知れない。

彼と話して、シッキムやアッサムの人と同じように彼のインド人に対する反感というものははっきりと感じる。そのことは反面、日本人への親近感となって返ってくる。「我々はインド人とは違うんだ」と短い時間の間に数回いった。この言葉は3年前、アッサムのディブルガールでアホンの末えいという人からも聞いた言葉だ。

また、彼は中国やベトナム、ラオス、ビルマについて語り—これらの国はナガと関係が深い—しきりと“ Kommunismus ”うんぬんと話したのが注目された。彼は、ナガのさまざまな運動の中でどういう勢力に属して、ナガ政府の連絡官としてデリーではどういうことをしているのかなどを理解してかからねばならないと思う。

ナガについては私自身、情報不足であるから、K氏の言葉を批判的に判断はできないので、一応忠実に記録しておくことにした。ただ、彼はインド中央政府と丸々“ベツタリ”の関係ではないことは確かである。

.....
 : ヒマラヤに関する質問と解答 :

《問》 外国人(インドやネパール人)を日本へ招待したいのですがどうしたらよいでしょうか。

《答》 各国によって事情は違いますので、本人または家族の人にその国にある日本大使館に行つて必要書類を聞いてもらい、それを日本でととのえて送ってあげることになります。大体、下記のものが必要です。

1. 入国理由書(研修や留学の場合は詳細な日程なども必要。観光の場合も簡単な日程をつける)
2. 身元保証書(公証人役場で公正証書にしてもらう方がよい。法務局で聞くのもよい)
3. 身元保証人の戸籍謄本
4. 身元保証人の財政保証書(所得税納税証明書でもよい)

以上が日本のビザを取得するために最低必要なものです。いずれも原則として日本語でよい。観光の場合は比較的簡単にビザを発行してもらえますが、それ以外は時間もかかるし、さらに、他に提出を要求される書類もあります。観光ビザの場合でも少なくとも2カ月はかかります。

なお、本人のパスポートをとるには1、2、4を英文で作製し、それに国によっては飛行機の切符を送るなど、ギャランティ渡航(全費用を日本側で負担)の手続が必要です。

そして、本人が日本へ到着すれば、外人登録をすませたり、その国の大使館への連絡、帰国のときの手続など、かなりの世話をしなければなりませんのでそのつもりで招待した方がよろしいでしょう。

~~~~~  
 ※ 第6回東日本ヒマラヤ研究会収支決算報告 ※

|    |          |         |          |         |     |
|----|----------|---------|----------|---------|-----|
| 収入 | 会費       | 806,300 | 雑収入      | 4,500   | (円) |
|    |          |         | 合計       | 810,800 |     |
| 支出 | 会場費      | 575,114 | 印刷費      | 18,000  |     |
|    | 通信費      | 29,650  | 記録費      | 7,200   |     |
|    | 事務費      | 10,500  | 謝礼       | 21,500  |     |
|    | 報告書出版準備費 | 135,000 |          |         | (円) |
|    |          |         | 合計       | 810,800 |     |
|    |          |         | 以上報告します。 | 係: 館野   |     |



しかしながら、ルッドローおよびシェリフの東部ヒマラヤ地域における活動の全貌については、殆んど知られていなかったといつてよい。登山のはなばなしがないだけに、ひっそりと片隅に埋れていたという感じである。ヒマラヤン・ジャーナル掲載の記録はその一部にすぎない。最初は第6巻にそのブータン行が紹介されている。1933年の記録である。1934年のブータン行は第7巻に紹介されている。1936年のスバシリ行は第9巻に紹介されているが、正式な報告は第10巻に掲載されている。1938年のツェンポー行は第12巻に正式に報告されているが、このときはじめてナムチャ・バルワの写真が紹介されている。これらのうち、第6巻、第9巻、第12巻の巻頭写真に彼らの写真が採用されていることをみても、彼らの業績のすばらしさがわかるのである。

上述したように、ヒマラヤン・ジャーナルでは簡単にふれている場合が多く、また、全く紹介されていない紀行がある。上述以外には、1937年のブータン行、1942-5年のラッサ、1946-7年のツェンポーのゴルジュ行、1949年のブータン行などの山旅がある。ブータンに関して、かれら程の足跡を残したものは、先にも後にもいないのである。東部ヒマラヤにおいては、キングドン・ウォードの業績が光っているが、彼の場合はルッドローやシェリフなどとはちがって、地域的により東部である。ブータンおよびツェンポー附近の植物採集は、かれらの独壇場といつてよいだろう。けれども、かれらの探検もキングドン・ウォードとの連絡なしには考えられない。この先輩につねに連絡しながら、彼らの山旅はつづけられた。

さて、かれらの探検の概略についてはこの辺で筆を止めよう。ぼくは「花の谷」のことを語った方が心楽しい。“A Quest of Flowers”という本は文字どおり花を求めての山旅の本である。カバー写真も青いケツの花であるし、巻を開けば、巻頭を飾るは、ピンビ・ラ溪谷の美しい風景である。上には氷雪の山がそびえ、下には川が白い瀬を作りながら流れ、河辺には草原がひろがり、家が2、3軒みえる。草原をゆく現地の人一人見え、の

どかな風景である。きっと「花の谷」なのである。彼ら程ブータンに入ったものがないのに、ブータンの風俗とか山とかはあまり写真として紹介されていない。テーマはあくまでも花である。美しいカラー写真として紹介された花々は、じつにみるものを楽しませる。Meconopsis grandis、Primula tsongpenii、Meconopsis sherriffi、Primula kingii などの美しさは、それがたとい写真であってもすばらしい。メコンプシス属はケツ科であり、プリムラはご存じのとおり、サクラソウの種類である。シェリフの名のついた、メコンプシマ・シェリヒイは赤いケツである。

ここでは「花の谷」といつているけれども、この本では「花の峠」といつている。第一章の表題が「花の峠へ向つて」である。この1933年のとき、シェリフとルッドローは、シッキムのガントクから東へと向い、いくつもいくつも峠を越えて、トランジャンシイまで行つたのである。ブータンの川はだいたい北から南へと流れているから、西から東へと旅していけば、川を渡つて峠を越えることの連続である。ナツ・ラ、キュ・ラ、ハ・ラ、チュライ・ラ、ペラ・ラ、ドキヨン・ラ、ペレ・ラ、ユト・ラ、ルド・ラ、ボンガ・ラを越えたのである。それらの峠はすべてそれ程の高度はなく、文字どおり、花の峠なのである。かれらはそれからメ・ラまで行き、今度はチベット側に入って、ギャンツェまで、タン・ラをとおつてガルトクに帰るのであるが、メ・ラでは附近のなだらかな斜面を6時間ほど歩き廻つて、植物を採集した。彼らはここで多くの花を集めたので、メ・ラを「花の峠」と名づけたのである。この附近でもっとも豊富なのは、サクラソウの種類であった。そして、メ・ラにのみ咲く Primula jigmediana を発見した。これはブータン王にちなんで名付けられたのである。そのほかにも9種類のサクラソウの類を発見し、彼らは心楽しくメ・ラを去つたのであった。

## 外国へお金を送るには

書籍の購入や会費の納入、遠征隊や調査隊への必要経費、などなど、日本から外国へ送金する方法にはいろいろなものがありますが、50万円以下で比較的手軽に送金できる方法は下記のものがあります。

### イ 銀行振込

これは現地に本人または受取人の銀行口座を開設してある場合、これに日本から振込送金する方法で、最も受取が確実といえましょう。ただし、口座開設者のサインがないと受取れないことや、地方の都市などでは送金した銀行の支店または系列銀行がないときなど、本人が大きい都市まで出向く必要があるなど受取るとき手間がかかります。

日本側の銀行はいわゆる“外為銀行”(大きい銀行はたいてい“外為銀行”になっています)の窓口で相談ののつてくれます。金額によってはパスポートと外貨購入証明書が必要のことがあります。いずれの場合も、現地で受取れるお金の種類はたいていその国の通貨です。(インドならインドルピー)

### ロ 小切手送金

これは日本の小切手送金と同じ方法で、銀行で小切手を作ってもらってそれを書留で送る方法です。この場合、記名式で銀行渡し(横線小切手)など、なくした場合のための方法を購じると安心です。その方法は銀行で相談ののつてもらおうとよいでしょう。

### ハ 外国郵便為替と振替

一番手軽な方法です。郵政局では次のようにP.Rしています。

#### \* 通常為替・電信為替

為替証書を郵便局から受取人の方へお届けします。電信為替は、各国相互間の電信を利用して連絡するもので、お急ぎの時に利用されると便利です。料金は10万円円で900円などと割安です。

#### \* 通常払込為替・電信払込為替

受取人の方がその国の郵便振替口座をお持ちになっている場合に、ご利用いただけます。電信払込為替は、電信為替と同様に電信を利用して払込みの連絡をするものです。

#### \* 通常振替・電信振替(200円・プラス電話料)

送金人の方の郵便振替口座から受取人の方の郵便振替口座に、送金額を振り替える方法です。

電信振替は、各国相互間を電信を利用して連絡するもので、お急ぎの時に利用されると便利です。

#### \* 通常払込(300円)

受取人の方が郵便振替口座をお持ちになっていればご利用になれます。現在このお取扱いを行

イギリス、スウェーデン、デンマーク、ノルウェーの4か国だけとなっています。

#### ほとんどの国との送金ができます

送金できる国は全部で91か国。万国郵便条約をはじめとした国際間の連合条約、2か国相互間の条約を結んでいますから、海外の主要国との送金ができます。

#### 送金できる金額は

外国への送金には、外国為替管理法令による制限がありますが、つぎの範囲内のもは、郵便局の確認だけでお手軽に送金できます。

\* 特別な場合を除いて、送金人おひとりにつき1件200米ドル以内の送金には送金内容を証明する書類の提示は必要ありません。

\* 上記の送金額を超えても、その送金内容を証明する書類を郵便局に提示されますと、親族の方への贈与金については、送金人おひとりにつき1件5,000米ドルまで、医療費・会費などの分担金、検定料などについては、その実費の範囲内までが送金できます。

#### お取り扱いする郵便局は

外国あての送金は、郵便物の集配事務を行っている郵便局でお取り扱いしています。なお、外国からの送金の場合には、お受け取りになる郵便局が指定されていますので、その郵便局でお金をお受け取りください。

#### —ヒマラヤの地図に関心を持っておられる方へ—

「ヒマラヤ」10月号で紹介しました市販地図やその他の地図を入手したい方、また、ヒマラヤの地図について知りたい、研究したい方は下記へご連絡下さい。ヒマラヤ関係の地図について勉強して行きたいと思います。「中央アジア、ヒマラヤ地図研究会」(仮称)(略称、地図研究会)

## 日本からヒマラヤから

**Dr.P.C. Bora** アッサム 10月4日

先日はHAJの集会に招待していただき、何人かの会員の方と親しくお会いでき、一緒に山にも登れたことを大変嬉しく思っております。9月30日に東京からマニラへむかい、そのあとタイやスリランカに寄って12月にはアッサムへ帰ります。

**高木 泰夫様** 大垣 10月2日

「ヒマラヤ」アフガニスタン登山隊報告特集を拜読させていただき誠にありがとうございました。私にとりましてアフガンはやはり懐しきところで1968年の山行もつい先頃のことと思っております。(後略)

**稲葉フク子様** 宇都宮 10月7日

「ヒマラヤ」をありがとうございました。東日本研の折はお世話様でした。夏の終り、森吉山に登りました。深い森林に包まれた優美な山容に山への神秘的な想いを誘われました。

**羽根田一馬様** 豊田 10月1日

過日は娘むこのランジャンが来日し、HAJの方々に大変お世話になり、ありがとうございました。娘も、レイカとロビンの2人の子供も東京の高橋照さんと一緒に9月末頃にネパールへ帰国しました。

**佐藤 優様**(アフガン隊々員)奈良 10月1日

先日のアフガン登山報告のうち、私達がムンジャン北峰と思っていたのは未踏の無名峰らしいことが、村上隊員の写真から分りました。ムンジャン西峰ともいうべきピークと思います。

**佐々木 正様** 盛岡 10月4日

10月3日結婚し、好きなソゴトもサケも一時中止して妻のいうまま日本列島を歩いています。ヤマをすて、友をステ、海外などへも目をむけないつもりです。(奥さんのお名前は光恵さん、ネパールでの竹細工指導で有名な柴田氏のご令嬢です)

**水野 治郎様** サマルカンドにて 9月27日

西トルキスタンのサマルカンドに参りました。ベルジャン・ブルーの空を背景にして並ぶモスクの青い塔は見事です。明後日はブハラです。

**植竹 清孝様** 東京 10月1日

9月22日夜、日ネ協会による、ビレンドラ国王の中国四川省およびチベット訪門の35%フィルムを見る会に行ってきました。フィルムは3巻でしたが、映写がうまくゆかずチベットの部分を少し見ました。それでもポタラ宮内の仏像群は豪華絢爛で迫力がありました。(後略)

(その後、名古屋でTV放映されました。以下は中日新聞10月3日の「破調」欄にのった寸評です)

### — わずか5分で実のある報道 —

5分ほどの短いものだったが、チベットのラサ市の情景がフィルムで放映された。この印象深いフィルムは、1日夜11時のCBCテレビ「ニュースデスク」の中で紹介されたが、これまでほとんどのフィルムで紹介されたことのない興味深いものであった。

チベットはかつて“秘境”と呼ばれていた。高度3,000m以上の地区である。フィルムは白い連峰を映し出し、人口5万のラサ市の様子を伝えてくれた。かつて農奴制の強かったこの地方も、今日では織物業や電気工業が活発になり、集団農場が普及している。人びとの生活のふん囲気も明るい。

カメラは一転して民兵組織や学校の様子を映し出す。中国の自治区の1つとなっているチベットをよく示す1コマである。中でも強い印象を与えたのは、かつてのダライ・ラマの居城の壮大な外景と数多い仏像の群れであった。この仏像の群れは、それぞれ表情もちがいが、姿勢もちがっていた。

永年続いた農奴制の上に乗ってこそ、このような“芸術”作品が生まれたのか、仏像をきざみ、仏画を描いた職人たちの執念が強く感じられるようであった。

## 新刊・旧刊案内

### 出版社PR誌2冊から

Mook (ムック)が、わが国出版界で話題となっている。雑誌Magazineと書籍bookの合成語で出身はアメリカ。図版、写真、表を大幅にとり入れ、本を読むと同時に見ることの好きな新世代向け新型書籍。新世代とは若年層と婦人たち。

以上は「波」1976年9月号(新潮社)の編集後記にあったものの一部。同欄では、このスタイルによる江藤淳の新刊も発売を予告している。新刊本を見てからでないとは正確ではないが、新スタイルから連想するのは、今も続く「カタログブーム」だ(もっともこのカタログ類は書籍型雑誌と呼ぶらしい)。日本でのブームは本家の若者思想までも売り物にした上、アメリカ商品と生活の紹介カタログとなったが、こういった本のつくりかた自体もカタログ以外の本にまで影響をおよぼしたことになる。

テレビ以後の世代の成長が、マンガ誌とカタログの流行を成立させたのだろうが、Mook化を評して思考判断力の欠除した人間を育てるばかり、とはいえない。一面、こうも考えられよう。mook化された本が持つ情報の質と量は活字だけに比べ、ものによっては文章よりも表現方法で勝るものがあるように思う。ただ、そんな場合、読み手のほうでよほど解析能力を持っていないと、深部まではつかめない。たとえばmook化の極限として地形図や設計図が1頁大に登場してきたら、これは一種の暗号解読、もしくは文字どおり“絵とき”になってしまう。

もちろん、そういったmook化本はなかなか一般向けにはなりにくいだろう。そもそもの発端は眺めてわかった気になるのが条件だったのだから。しかし、ある水準以上のmook本に対して、読む者と眺める者との習得差は、活字だけの本に対してよりも著じるしくなるように思う。

で、mook化からもう一つ連想するのは、本場カタログと同じに自分らの経験を、自分らの手づくりまでまとめあげる登山報告書である。内容的にもmook的だ。すでに登山商業誌がmook化のいきおいを強めているのに報告書はまだまだの感

がある。それはある面で救いでもあるようだ。

報告書の送り手と受け手との間で、解析能力に差のある場合、受け手が強力ならば、さして問題がないが、逆だったらmook的用法で送り手の思いどおりに簡略に作れるからだ。これは、良心的な送り手がmook用法で報告書を仕上げようとするとは俄然、むずかしくなることにも通ずる。そんなmook的本としてヒマラヤトレッキング(五百沢智也 山と溪谷社)をあげられる。

カタログのmook化は、本づくりのため手軽な手法のためにそうなったのではなく、伝達のためには、文章より適性あり、と判断されたからだ。報告書も当然そうであろう。

### もう1冊のPR誌から

登山報告書を共同研究の成果発表とみれば、結果を外部に広める報告書で、書き手が複数にわたるのになぜか一応の統一がとれた本として完成するのは少しも不思議でない。そのわけは、書き手達きわめて強力な共通の登山概念を持ちあっているからだ。

ここでは、熟達したまとめ役がいなくても最少限の内容の報告書が、自然にできあがってしまう下地がすでに練られている。一つのテーマをグループが共同生産し、共同管理しているのでテーマから派生する小テーマも全体にバランスがとれてくる。

それでは、同じ登山界で、別々に発表された文章を一つのテーマのもとに集めるとどんな具合になるだろう。たとえば、数年という短期間中に発表されたものを素材にすると、単独文章として初出時に味わった新鮮さ、驚きは消えてしまうことが多い。製作過程を共同研究的にしても一味違ってしまふようだ。素材自身の問題も部分的にはあるが……………。

複数の書き手による出版物は、たとえ書きおろしであってもよいほどの共通認識があるか、あるいは、事情によく精通した編者がいるか、で個々の価値、すなわち全体的な効果が出現するものらしい。

「U.P」1976年8月号(東京大学出版会)の編集後記では、社会科学系論文集への書評から、「論文集は五百羅漢的、豪勢な福笑いになる」と引用している。なお、本誌8月号で紹介されていた東洋文庫の出版物、目録など一部を東京大学出版会でも販売している。

ヒマラヤから祖国へ 岩村 昇著 主婦の友社  
52年9月 980円 B6判

「ネパールでの医療活動から学んだ“愛の医療”を訴える。肉体だけ癒しても人の心が救えない医療は結局むなしなものではないか……」

チベット語字典 芳村修基編 12,000円  
法蔵館 51年

仏教学辞典などを出している出版社による本。

古代遊牧帝国 護 雅夫著 中央公論社  
440円 新書判 51年7月25日

トルコ民族の歴史を追いながらそれによって東西交渉の歴史を考えたものである。シルクロードの歴史にも触れている。少し固い内容。

この中公新書には、以前にも紹介したが、「元朝秘史」(岩村忍)、「満州事変への道」(馬場伸也)、「満州事変」(臼井勝美)、「草原の革命家たち」(田中克彦)、「インド独立史」(森本達雄)などいい本が多い。

**Tibetan Language : Three Study Tools**  
by Narkyid Tibet House, New Delhi 2,450円

チベット人学者による実用的学習書で、特に発音に重点をおいている。B6判 328ページ

この本ならびにインド発行の本は(懶)東方界、東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル6F ☎03-264-3466で扱っている。

**Everest the Hard Way** by C.Bonington

副題に The First Ascent of the South West Face, とあるように1974年のエベレスト南壁の成功をまとめたもの。1976年刊 Hodder & Stought, London, 320p. 5,280円

以下は「東洋学報」で紹介されていた50年12月

～51年1月25日に発行された本である。

古代の東アジア世界 江上波夫、松本清張編  
読売新聞社 980円 50年

写真集「満州」 一色達夫、宇野木敏編  
東京ベストセラーズ 50年 2,500円

世界探訪・ユーラシア大陸紀行 太田南沼著  
東京文研出版 50年 1,000円

晩秋のヘラート 服部直人訳著  
京都 社団法人・日本イスラム友愛協会

モンゴル資料集 第1、第2 宮地亮一編著  
各1,200円 50年 東京ビブリオ

モンゴル人民共和国地図 (300万分の1) 50年  
日本モンゴル協会編 1,500円 東京ビブリオ

イラン、栄光の過去と現在 黒柳恒男著  
東京泰流社 50年 1,500円

思い出の内モンゴ、内モンゴ回顧録  
東京らくだ会本部 10,000円 51年

ネパールわが祈りの座、チャバガオン診療所の記録  
俵友 恵著、日本キリスト教海外医療協力会 51年 500円

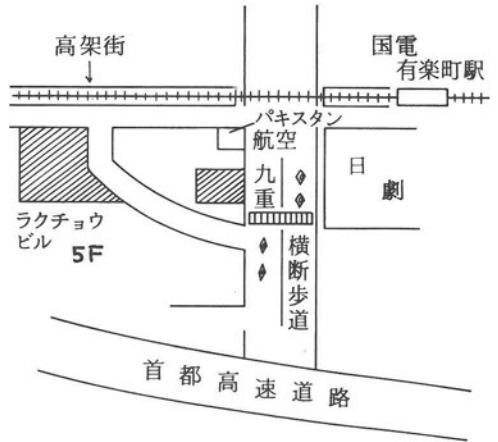
オリエントの嵐、中東現代史  
ブノアメジャン著 牟田口義郎訳  
51年 東京筑摩書房 1,400円

灰色の狼——ムスタファ・ケマル——新生トルコの誕生 51年 東京筑摩書房 1,400円

ヒマラヤの花嫁 平尾和雄 著  
日本交通公社 51年10月20日 780円  
タトパニのスルジェという女性と結婚し、民宿を経営した業者のネパールでの生活。「スルジェ館」を通してみたヒマラヤ讃歌。

# HAJ 1977 ヒマラヤ・ツアー

お問い合わせお申込みは下記へ一打合せは毎月第  
4 金曜日の東京定例集会などヒマラヤ集会で。



下記の日程や費用は51年11月1日を基準として  
おり、航空機、現地の都合で予告なく変更する  
ことがあります。詳しい日程表などがありますので  
ご請求下さい。(※印はHAJ会員のみ参加可)

ヒマラヤ・シルクロードに関する旅行や登山に関するお問い合わせを歓迎します。日程の相談、航空券  
の手配、ビザの代理申請、現地手配、山岳保険、トレッキング保険などなど何でもどうぞ。

| 出発日    | 地域・ツアー名                 | 期間(日) | 費用<br>(円) | メ切日  | 定員 | 添乗員     |
|--------|-------------------------|-------|-----------|------|----|---------|
| 2月13日  | 黄金のバゴダと雄大なカンチェンジュンガの展望  | 15    | 385       | 12月末 | 20 | 有       |
| 3月16日  | シルクロード・ソ連の旅             | ※19   | 398       | 12月末 | 20 | 有       |
| 4月21日  | ガルワール・ヒマラヤの奥地と野生動物を訪ねて  | 18    | 389       | 2月末  | 20 | 有       |
| 4月21日  | インド放浪の旅(自由旅行)           | 24    | 230       | 2月末  | 20 | 前半のみ    |
| 4月28日  | ネパール・ビスタリー・ツアー          | 11    | 378       | 2月末  | 20 | 有       |
| 4月28日  | ネパール・ビスタリー・ツアー          | 12    | 398       | 3月末  | 20 | 有       |
| 7月24日  | 小チベット・ラダックと未知なるザスカール山群へ | 28    | 372       | 5月末  | 20 | 後半のみ    |
| 7月28日  | カンシールの花や氷河を楽しむ(自由旅行)    | 18    | 315       | 5月末  | 20 | 有       |
| 7月28日  | 世界の屋根を行く(ラダックを車で一周)     | ※18   | 450       | 5月末  | 20 | 前半のみ    |
| 8月7日   | 東洋のスイス・カンシール・バカンス旅行     | 14    | 372       | 6月末  | 20 | 有       |
| 9月11日  | シルクロード・アフガニスタンの旅        | ※14   | 398       | 7月末  | 20 | 有       |
| 9月15日  | インド放浪の旅(自由旅行)           | 24    | 230       | 7月末  | 20 | 前半のみ    |
| 9月15日  | ヒマラヤの高山植物を求めて           | 17    | 369       | 7月末  | 20 | 有       |
| 9月29日  | ネパール・ビスタリー・ツアー          | 11    | 378       | 7月末  | 20 | 有       |
| 10月9日  | インド放浪の旅(自由旅行)           | 28    | 230       | 8月末  | 20 | 無       |
| 10月27日 | ネパール・ビスタリー・ツアー          | 11    | 378       | 8月末  | 20 | 有       |
| 11月13日 | インド放浪の旅(自由旅行)           | 28    | 230       | 9月末  | 20 | 無       |
| 12月25日 | ガンジス源流を訪れる、聖地を巡る旅       | 14    | 379       | 11月末 | 20 | 有       |
| 12月25日 | ネパール自由トレッキング            | 28    | 261       | 11月末 | 20 | 前半のみ    |
| 12月25日 | アンナプルナを望む丘へ小トレッキング      | 14    | 348(247)  | 11月末 | 20 | 有(子供も可) |
| 12月25日 | 第3次アッサム・ジッキム調査隊         | ※28   | 423       | 8月末  | 20 | 前半のみ    |
| 12月26日 | 雄大なカンチェンジュンガとネパールの休日    | 14    | 381       | 11月末 | 20 | 有       |
| 12月26日 | ネパール自由トレッキングツアー         | 17    | 261       | 11月末 | 20 | 前半のみ    |
| 12月29日 | ネパール・ビスタリー・ツアー          | 11    | 378       | 11月末 | 20 | 有       |

## ヒマラヤの旅はヒマラヤのヨロズ屋へ

トレッキングからエクスペディション  
まで全て引き受けます。

装備貸出・シェルパ斡旋・現地食料調達  
国内外輸送手配・別送貨物通関・ヒマラヤ情報……

EXPRESS TREKKING (P) LTD.

EXPRESS HOUSE

NAXAL BHAGABATI BAHAL

P. O. BOX339 KATHMANDU NEPAL

電話 GREATREK・KATHMANDU TEL. 13017

カトマンズの宿泊は EXPRESS HOUSE

をご利用ください。

家庭的なムードで宿泊代も安く気軽に泊れる宿です。  
特に日本のお客様には大浴場が好評です。自炊もでき  
ます。 宿泊代=1泊朝食付30RS から

※長期滞在者はご相談に応じます。

### 日本語でお問い合わせください

インド大陸、中近東方面へ当社独自のプランをいたしております

### ツアー名

- ★シルクロード 6,000キロ
- ★ネパールとアフガニスタン
- ★砂漠の国アフガニスタンと最  
後の桃源境フンザ
- ★大ペルシャとアフガニスタン

——お問い合わせは下記まで——

### (株) トラベル日本

〒100 東京都千代田区有楽町2-2-1

ラクチョウビル5F 電話 (03) 572-1461

担 当——外池・永瀬・月候・小島

## 海外登山，トレッキングに傷害保険を

海外旅行傷害保険(運動危険担保特約付)について研究しております

タケ  
岳 産 業 にご相談して下さい！

あなたの所得を補償する保険をご存じですか？(所得補償保険)

●所得補償1～5年，傷害特約60～120倍までいろいろあります

自動車・火災・レジャー(山岳保険・国内旅行・つり・ゴルフ・ヨット)・普通傷害・利益  
・生産物等の私達の生活に関連した保険を取扱っています。岳産業の西田までご連絡下さい

大正海上火災  
保険(株)代理店

タケ  
岳 産 業

大阪市淀川区西中島町5丁目第3チサン10F 6号 〒532

TEL 06 (304) 1115 番

●ルストキ=大正海上十三営業所 304-5774

